

# 好ましい人間関係を育む手立て

—教師と生徒の対話の量と質の観点から—

カウンセラー研究員 津坂 久遠（川崎市立日吉中学校）

## I 主題設定の理由

近年、社会の変容を背景に、地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場が少なくなり、仲間集団を形成する機会が減少するなど、生徒を取り巻く環境の変化が指摘されている<sup>1</sup>。家庭以外での大人との関わりが少なくなる社会においては、学校での教師と生徒の人間関係は非常に重要であると考えられる。

学校における教育活動では、設定した課題の達成が大切であると考えられる。その際、課題に対して教師も生徒も同じ方向を向いて活動に取り組んでいくことを目指していかねばならない。生徒自らが現在および将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すことが大切だからである。そのためには教師と生徒が互いに信頼関係で結ばれていることが不可欠であることから、信頼関係で結ばれ、課題達成のために協働する人間関係こそが学校における「好ましい人間関係」ではないかと考えた。

平成 25 年度に日吉中学校では人権尊重教育の研究推進校として様々な教育実践を行い、その中で、生徒の実態調査のためのアンケートを実施した。その結果、他の数値と比較して、自己有用感を表す数値が低く、本校の生徒は「自分が役に立っている」と自信をもって言うことのできる生徒が少ないことが分かった。この自己有用感の育成には、肯定的評価を積極的に行い、体験的に積み重ねていけるように配慮する必要がある<sup>2</sup>が、このような肯定的評価をする際にも教師と生徒の「好ましい人間関係」が必要であると考えた。

これらのことから、中学校における教師と生徒の関わり合いの在り方を探り、より良い学校集団を形成する一助となるように、この主題を設定した。

## II 研究の内容

### 1 本校における生徒の実態把握（4月）

1・2・3学年から無作為に1学級ずつ抽出した学級において、学活の時間を利用して現在の生徒の実態把握をするために「教師に対しての関わりの実感」、「自分の所属する学級に対する思いと実感」、「家庭での実感」「自己有用感」について19問からなる5件法のアンケート調査を行った。

集計の際に1日30秒以上教師と話す生徒を「教師との対話が多い生徒」とし、集団Aと定義した。また、1日30秒未満の生徒を「教師と対話の少ない生徒」とし、集団Bと定義したうえで比較を行った。これは、全国教育研究所連盟によると教師と生徒の会話時間の実測が平均28秒であったとされていることから、本研究ではこれを踏まえ、生徒の実感として1日30秒程度の対話を1つの基準とした<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「生徒指導の諸問題の推移とこれからの生徒指導」2008年 pp.10-11

<sup>2</sup> 岩手県総合教育センター「事例集」

www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi/mysite3/.../jikoyu-yo-kan. アクセス日時 2014.9.3 14:57

<sup>3</sup> 全国教育研究所連盟『学級担任による教育相談の展開』1989年 東洋館出版社 p.18

## (1) 仮説

調査を行うに当たり仮説を立てた。集団Aの生徒は、表1のような好ましい状態であると考えた。

表1 集団Aについての仮説

理解されている実感	「先生は自分をわかってくれている」という思いが高い。
グループの人数	学級内で多くの生徒と互いに人間関係を育てているため、比較的大きなグループを築いており、人間関係能力が高い。
学級の仲	学級の仲が良いと感じ、「好ましい人間関係」を築いていることを実感している。
葛藤を乗り越える力	嫌なことがあっても学校生活を楽しいと思っている。

## (2) 考察

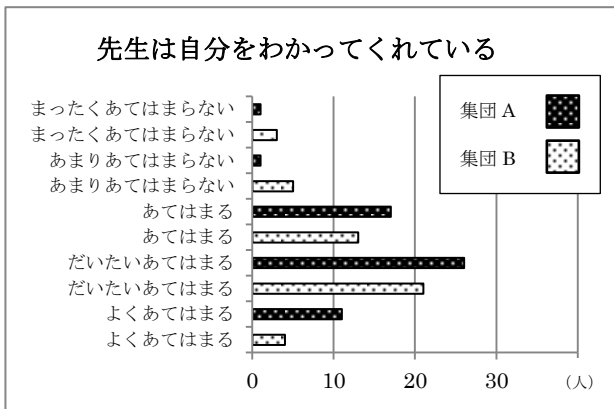


図1 自分が理解されている実感をもつ生徒数の比較

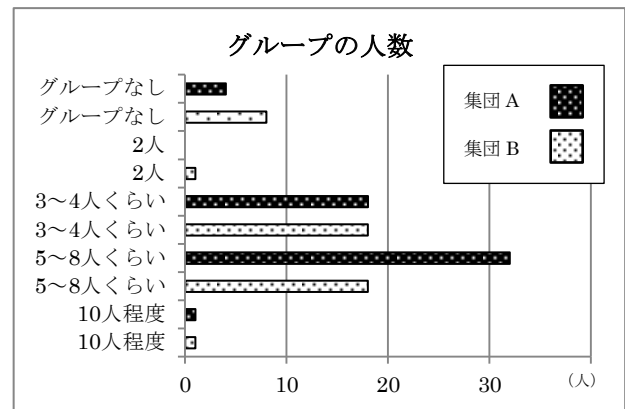


図2 構成グループ規模の比較

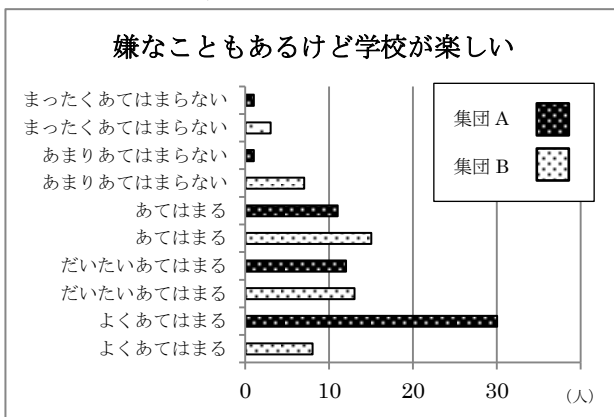


図3 学校が楽しいと思う生徒数の比較

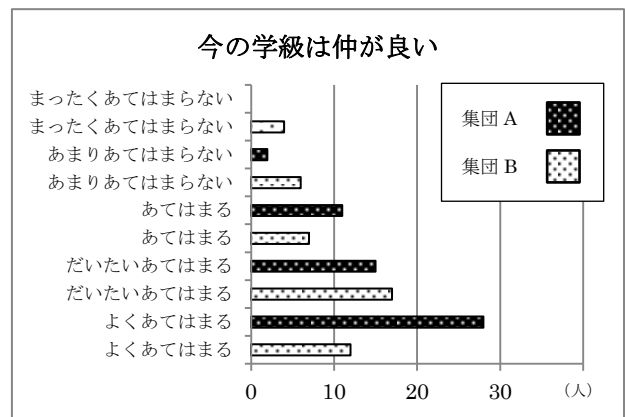


図4 自分の学級の仲が良いと感じる実感の比較

図1から、集団AとBを比較すると、集団Aの生徒のほうが教師から理解されている実感が高いことが分かった。図2の「構成グループ規模の比較」については、生徒のグループの規模と人間関係能力の関係について、諸富(1999)は「2~3名の小さなグループを作っている子どもは人間関係能力が低く、一方比較的大きなグループをつくっている子どもは友だちをつくったり、人と仲良くなったりする人間関係能力が高い<sup>4</sup>と述べている。そのことから、教師との人間関係を構築できている生徒は、人間関係能力も高いと考えた。そして、集団AとBの比較の結果、仮説の通り集団Aのほうが比較的大きなグループをつくっていることが分かった。

図3の「学校を楽しんでいる生徒数の比較」については集団Aに属している生徒のほうが、より学校を楽しんでいることが分かった。

<sup>4</sup> 諸富祥彦『学校現場で使えるカウンセリングテクニック(上)』誠信書房1999年p.36

また、図4の「自分の学級の仲が良いと感じる実感の比較」については、集団Aに属している生徒のほうが、自分の学級に対し肯定的な見方をし、学級内で良い人間関係を築いていることが分かった。

以上のことから、教師と対話が多い生徒ほど、仮説の通りに「先生は自分をわかってくれているという思いが高い」、「比較的大きなグループを築いており人間関係能力が高い」、「学級の仲が良いと感じている」、「学校生活を楽しんでいる」と思っている状態であることが分かった。

## 2 「教師と生徒の対話の量の変化と生徒の様子に関連性の調査」(5～7月)

アンケートの結果から「教師と対話が多い」と感じている生徒ほど、「学校を楽しんでいる」と思うなど、好ましい状態であることが分かった。そこで、教師と生徒の対話の量が増えると、どのような傾向が表れるかを調査した。初めに教師と生徒の対話時間を増やすことを試みた。本校では、5月に体育祭、修学旅行などがあり、普段の学校生活よりも教師が生徒と接する機会が純増する。また、生徒と教師の対話時間を増やすために、抽出した学級の担任教師への啓発を行い、意図的に対話の時間を増やすことを依頼した。

さらに、年度当初に行われた教育相談アンケートを基にして学級担任による教育相談を行い、教師と生徒の対話時間を確保した。このように教師と生徒の対話時間が確保された時期の直後である6月初旬に、前回と同様のアンケート調査を実施し、教師と生徒の対話時間が純増するとどのような影響があるかを調査した。

逆に、中間テストが終わり、夏の神奈川県中学校総合体育大会が始まる時期である7月に3回目のアンケート調査を行った。この時期は教師と生徒が対話する時間が制約される時期であり、教師と生徒の対話時間が減少するとどのような影響があるかを調査した。

### (1) 仮説

教師と生徒の対話の量が増減すると、表2のような傾向が出ると考えた。

表2 教師と生徒の対話の量の変化と生徒の様子に関連性についての仮説

	対話の量が増加	対話の量が減少
理解されている実感	「先生は自分をわかってくれている」という思いが高まり、信頼が深まる。	「先生は自分をわかってくれている」という思いが薄まり、信頼が深まらない。
グループの人数	生徒同士の関係が育まれ、比較的大きなグループをつくるようになっており、人間関係能力が高いと考えられる。	生徒同士の関係が希薄になり、比較的小きなグループに分かれており、人間関係能力が低くなっていると考えられる。
学級の仲	学級の仲が良いと感じるようになり、「好ましい人間関係」を築いていることを実感している。	学級の仲が良いと感じないようになり、「好ましい人間関係」を築いていることが実感できていない。
葛藤を乗り越える力	嫌なことがあっても学校生活を楽しんでいると思う場面が多くなる。	嫌なことがあっても学校生活を楽しんでいると思う場面が少なくなる。

### (2) 考察

図5より、教師と生徒の対話の量の実感は、予想通りの結果となった。6月の調査では増加し、7月の調査になると減少した。

そして、図6～9より、教師と生徒の対話の量が多い時期のほうが、教師から理解されている実感が高く、比較的大きなグループを築いているため、人間関係能力が高い。また、学級の仲が良いと感じ、

「好ましい人間関係」を育んでいる。そして、嫌なことがあっても学校生活を楽しいと思っている傾向が高いことが分かった。

堀（2011）は、教員が身に付けておきたい 10 の原則の 1 つとして、「時間的に空白をつくらない」ことをあげた。その意義として、生徒と一緒にいる時間を多くしてコミュニケーションを図り「人間関係」をつくることを挙げている<sup>5</sup>。このことから、生徒と対話する時間を増やすことが教育的にも大きな意義をもっていると言える。

しかし、生徒との対話に割ける時間には限界があり、現時点でも生徒と対話する時間は相当の努力で確保している現状がある。そこで、生徒との対話の「量」ではなく、「質」を向上させることができれば、同様の結果が得られると考えた。

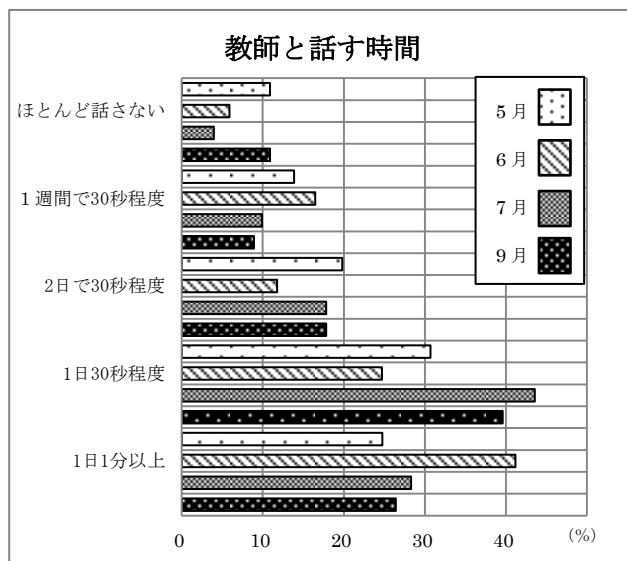


図5 教師と生徒の対話の量の実感の推移

### 3 調査協力学級の担任に対する研修（8月）

教師と生徒の対話の「質」が向上すれば、「先生に話を聞いてもらっている」「先生は理解してくれている」という生徒の実感が向上すると考え、その取組の一つとしてカウンセリングマインドで用いられる方法を取り入れた。まずは、調査に協力してもらっている学級担任に次のような研修を行い、対話の質を上げることを試みた。研修に対して負担に感じることなく前向きに受けもらうために、内容を簡素化し、A4用紙4枚程度の資料を用いて短時間で終わるものにした。研修の内容は以下の4つである。

- ① 2つのケースを例示し、生徒の発言に対してどのような言葉で返すかを考える。
- ② こじらせるような応答をどう思うか意見を出し合い、まとめる。
- ③ 互いに話し手と聞き手を決め、5分間話を聴いてみる。
- ④ 「聞いてもらっている」と実感してもらえらるための応答を伝える。

さらに、④の応答のポイントとして以下のものを伝えた。

- ・とにかく生徒から話をさせ、話題は限定しない。沈黙にはたくさんの種類があるが、「話をしたいが言い出せない沈黙」と「言葉をためている沈黙」は待つ。何分でも待つ。
- ・話の中で「自分の感情を表す言葉」が出てくるので、それを聞き出す。
- ・「自分の感情を表す言葉」が出てきたら、話し手を主語にした形で、その言葉を繰り返す形で返答する。「あなたは、〇〇だったんですね」「あなたは△△と思ったんですね」などがある。
- ・前述の返答の効果としては、話がより自分の心の深淵に触れる形へ変容することや、「自分の気持ちを出せる」、「自分の気持ちに気付く」、「聞き手に対して話を聞いてもらっている」という実感を生徒がもつようになり、教師が信頼を得ることをできるようになる。
- ・困っている生徒へのアドバイスは不要であり、とても負担に感じる。解決策は自分で分かっていることが多い。

研修を実施した後、日常の生徒との対話の中でこれらの受け答えが生かせる場面での活用を依頼した。

<sup>5</sup>堀裕嗣『生徒指導 10 の原理・100 の原則』 学事出版 2011 年 p. 75

#### 4 「教師と生徒の対話の質の変化と生徒の様子に関連性の調査」(9~10月)

前調査より、教師と生徒の対話の量が多くなると好ましい状態になることが分かった。同様に教師が生徒との対話の質を変化させると、どのような傾向が表れるかを調査した。

##### (1) 仮説

対話の量を多くしたのと同様に、表3のような傾向が高くなると考えた。

表3 教師と生徒の対話の質の変化と生徒の様子に関連性についての仮説

理解されている実感	「先生は自分をわかってくれている」という思いが高まり、信頼が深まる。
グループの人数	生徒同士の関係が育まれ、比較的大きなグループをつくるようになっており、人間関係能力が高いと考えられる。
学級の仲	学級の仲が良いと感じるようになり、「好ましい人間関係」を築いていることを実感している。
葛藤を乗り越える力	嫌なことがあっても学校生活を楽しいと思う場面が多くなり、楽しいと感じるようになる。

##### (2) 考察

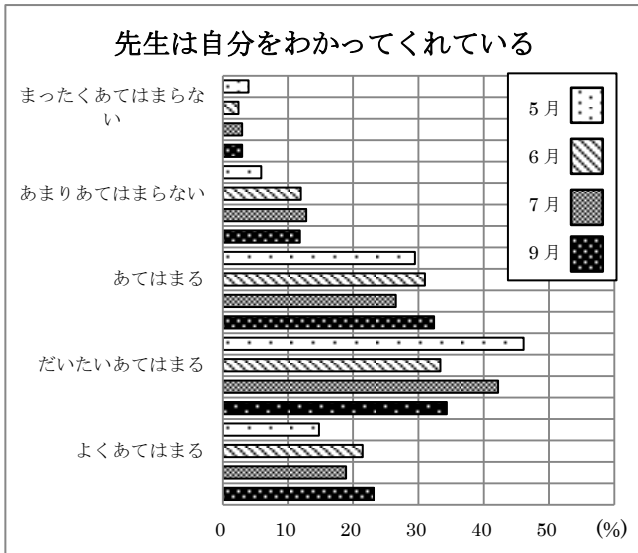


図6 自分が理解されている実感の推移

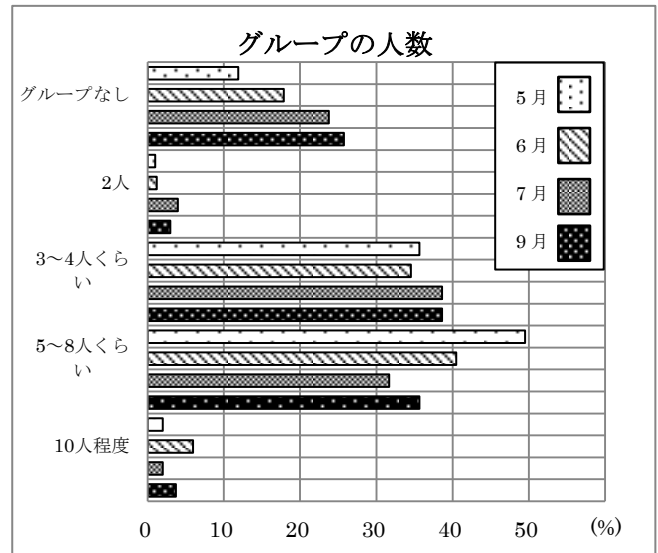


図7 グループの人数の推移

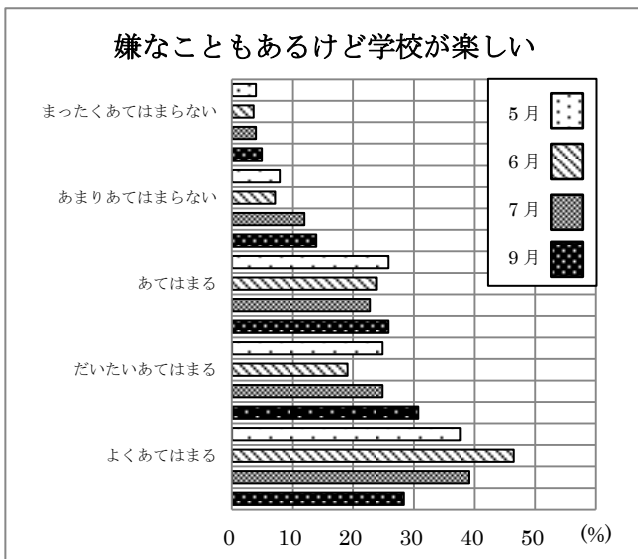


図8 学校が楽しいと感じる生徒の割合の推移

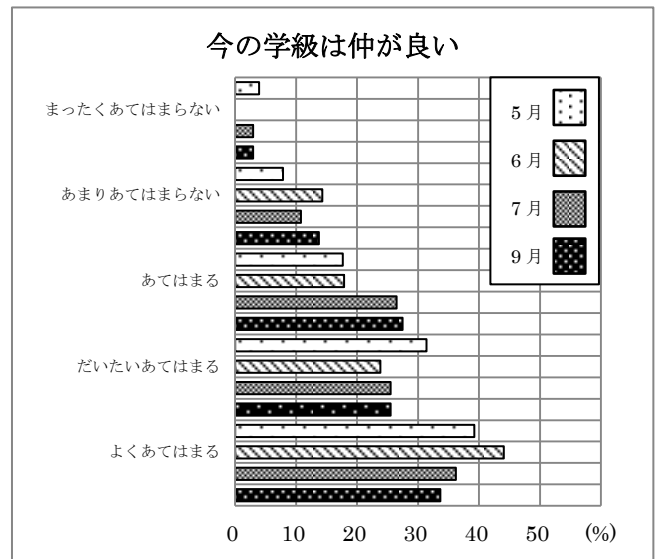


図9 学級の仲が良いという実感の推移

仮説と異なった結果としては、図8、9より、「学校が楽しい」、「学級の仲が良い」と強く感じたりする生徒の割合が大きく減少し、「だいたいあてはまる」「あてはまる」という回答などの割合が増加した点である。仮説の通りの結果としては、図5より、担任の先生と1日に話す時間の実感は減少したが、図6より、理解をしてくれている実感は向上が見られた。そして、図7より、グループの規模は大きくなったことが分かった。

学校が楽しいという実感や学級の仲が良いという実感については、「だいたいあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合が増加し、大きな効果は見られなかった。

これらの結果より、対話の質を向上させることによって、実際の対話の時間が減少しても、教師に理解してもらっている実感は向上する可能性があることが分かった。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究から学んだもの

表 4 教師が考える効果

効果があった場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自分の気持ちを話してくれることが多くなった。</li> <li>・教育相談期間における1対1の場面で効果的な場面が見られた。</li> <li>・いつも無口な生徒や担任と性別の異なる生徒に特に有効なことが多い。</li> <li>・何度か行ううちに、深い悩みや自分の気持ちを話すようになった。</li> <li>・(結果として)意図的に生徒に声をかける場面が多くなった。</li> </ul>
----------	---

協力を依頼した教師自身を感じる効果としては、表4のようなものが挙げられる。実践そのものの効果はもちろんだが、意図的に生徒に声をかける場面が多くなったという効果からも見られるように、教師自身の変容も見られることから、教師と生徒の対話の質の向上は教師にとっても効果的である。

この研究では、学級内で教師と対話の量が多い生徒ほど、「先生は自分をわかってくれている」という実感が高い傾向をもつことや、所属グループ規模が大きく人間関係を育む能力が高い傾向であること、嫌なことがあっても学校生活が楽しいと思っている傾向が高いことなどが分かった。

そして、対話の量が増加すると、より効果が高まる可能性があることが分かった。しかしながら、現状で精一杯生徒と対話している中で、生徒との対話の量をこれ以上増やすことは至難の業である。

そこで、生徒との対話の「質」を向上させることにより、生徒との相互理解を深めることを試みたところ、教師との物理的な対話の量が減少しても、生徒が「話を聞いてもらえている」「先生は理解してくれている」という実感を向上させる可能性があることが分かった。そして、その実感はより良い人間関係を育むことに結び付いていくと考えられる。なぜならば、豊かな人間関係を基にして、特別活動や学校行事などを活用することによって、自己有用感や学校生活に対する前向きな気持ちに結び付けることが可能であり、そのことがより良い生徒集団の構築とより良い学校へ向かっていく一つの方法になりうるのではないかと感じたからである。

そして、調査を行った生徒の感想からも資料1のような感想を得られることができた。対話の質を向上させると、生徒の「話を聞いてくれる」という思いが高まり、共感している姿勢が「わかっている」という思いにつながる事が分かり、数値に表れない部分でも一定の効果があったのではないかと考えた。

「先生は自分を知ってくれている」と感じるのはどんなときですか

友達に話せばいいことを  
しげんに聞いてくれる

「先生は自分を知ってくれている」と感じるのはどんなときですか

嫌なことがあつたりで話をしていられる時や、共感されてくれる時。  
全てを否定せず(それもはこうたがり)少しは共感しなかり聞いてくれる時。

資料1 11月に行った生徒の感想より一部抜粋

## 2 今後の課題

表5 教師が考える課題

課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師側が心の中で準備することが必要である。</li> <li>・日常の対話で気楽に行うようになるにはもっと経験が必要である。</li> <li>・沈黙を待ってあげることが物理的にできないことがある。</li> </ul>
----	--

協力を依頼した教師自身が感じる課題としては、表5のようなものが挙げられる。教師が心の中で準備を的確に行うなど、対話の質が向上されるためには、教師自身の力量の向上が必要であると考えられる。

また、本研究における今後の課題としては、3つ挙げられる。

1つ目は、本研究の対象をより広く細かく行うことである。今回は各学年1学級ずつ協力を依頼したが、全校規模で年間を通して実践し、検証を行うことができれば、より確かな結果を得ることができ、効果的に実践できると考えられる。

2つ目は、本研究はカウンセリングマインドの一部を応用したが、その技術をより高める方法の構築と、研修である。今回は協力を依頼した教師が重荷に感じないよう、分かりやすくした分、浅く限定的なものになった。今後は専門の講師と連携しながら研修を行えば、より効果的に実践できると思われる。

3つ目は、「好ましい人間関係」を利用した有効な取組の検証である。先にも述べたように、最終的に自己有用感の育成には、学校行事や学級活動、道徳、共生\*共育プログラムなどの取組を並行して行う必要があると考えている。その中のどのような取組が本研究と関連が深いのかは、引き続き検証が必要であると考えられる。

冒頭で述べたように、本実践によって、本校の課題である自己有用感の育成には至っていない。しかしながら、教師と生徒が「好ましい人間関係」を育む一つの方法としては、有効な手段であると思われる。最終的には、これらの「好ましい人間関係」を介して、本実践が自己有用感の育成につながると思われる。

最後に、このような研究の機会を与えていただいたことを感謝申し上げます。また、本研究に際しましては、ご指導ご鞭撻をいただきました川崎市総合教育センターの方々と、研究にご協力をいただきました、勤務先の篠宮敏校長先生をはじめ職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

### 【参考文献】

国立教育政策研究所生徒指導研究センター「生徒指導の諸問題の推移とこれからの生徒指導」 2008年  
岩手県立総合教育センター『事例集』 東洋館出版社 1989年  
諸富祥彦『学校現場で使えるカウンセリングテクニック(上)(下)』誠信書房 1999年

諸富祥彦『チャートでわかるカウンセリングテクニックで高める教師力 第2巻 気になる子とかかわるカウンセリング』ぎょうせい 2011年  
堀裕嗣『生徒指導10の原理・100の原則』学事出版 2011年  
加藤十八『鬼教師が日本の教育を救う』オークラ出版 2013年  
『生徒指導提要』文部科学省 2011年  
坂本秀夫『生徒懲戒の研究』学陽書房 1982年  
坂本秀夫『生徒規則マニュアル』ぎょうせい 1987年  
全国教育研究所連盟『学級担任における教育相談の展開』1989年  
金子保『担任が行う生徒指導・教育相談 中・高編』日本文化科学社 1984年  
宇留田敬・麦島文夫・宇井次郎 編  
『学校における非行問題2 教師・学校のもつ問題と対策』明治図書 1983年  
安藤操 編『先生少しは反省せよ』三一書房 1979年  
教育開発研究所『月刊 教職研修 2月号 3月号 5月号』2014年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事

中川 薫